
桜の花が咲く頃に

からたちみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の花が咲く頃に

【Nコード】

N2461G

【作者名】

からたちみかん

【あらすじ】

お互いに、傷を持ちながそれでも明日を信じている。

暖かな日差しが開け放った窓から差し込んでいた。もうじき春が来る。洗濯を干す手を止めて咲結実さゆみは白く霞んだ空を見上げた。

朝から憂鬱だった。せつかくの休日だと言うのに何もする気がおきない。春になるといつもそうだ。

「あ……」

アパートの二階の窓から外に目を向けると歩いてくる人影が見えた。一緒に暮らしている康彦やすひこの姿だった。咲結実さゆみは開けた窓から身を乗り出す。

「おかえり！ 康彦！」

咲結実さゆみに気がつくのと康彦は手を振り返す。康彦は夜勤明けで眠そうな顔をしながらも笑みを浮かべていた。咲結実さゆみは康彦が歩いてくる姿を階段の影に隠れて見えなくなるまで二階の窓から見ていた。すぐに階段を上る軋んだ音が響く。廊下を歩く足音が少しずつ近づいてくる。

「ただいま」

「おかえり康彦。おつかれさま」

ドアが開いて康彦が帰ってきた。咲結実さゆみは先ほどまでの憂鬱を押し殺し、笑顔で康彦を出迎える。

「今日休みなのか？」

咲結実さゆみの顔を見るなり康彦は言った。

「昨日休みだつて言ったじゃない。聞いてなかったの？」

唇を尖らせて咲結実さゆみは答える。

「あ……ごめん、ごめん。それより腹減ったナ」

誤魔化すように康彦は笑う。呆れた顔で咲結実さゆみはひとつため息をついた。苦笑いを浮かべる。

「すぐご飯用意するから。先にお風呂入って」

「おう」

言つて康彦は風呂場へと姿を消した。咲結実は急いで食事の用意をはじめた。

「さっぱりした」

性格的に気の短い康彦はお風呂に入るのも早い。ものの十分としないうちに風呂から上がってくる。康彦は茶の間のテーブルの前に座った。置いてあつた煙草に手を伸ばして火をつける。

「ねえ食事前に煙草吸つて味わからなくならない？」

咲結実は煙草を吸う康彦の姿を振り返つて言った。煙草を吸わない咲結実には信じられない行動だった。

「わかるよ」

大して気にもかけず康彦は答えた。

「もう」

小さく呟いて咲結実は口を尖らせた。せっかく料理を作っているのに食事前に煙草を吸われるのはあまり気分のいいものではない。何度言つても康彦は生返事で聞いてくれなかった。

「お待たせ」

「サンキュー」

不満はあつたけれど、康彦は何を作つても美味しいと言つてくれた。

「味わかつて食べてるの？」

「わかつてるよ。美味しいてつば」

言つて康彦は満面の笑みを浮かべる。騙されているのかしら？と思ひながらも咲結実は食事する康彦を見つめていた。いつもきれいに食べてくれる康彦に咲結実の顔には自然と笑みが浮かぶ。

「ごちそうさん」

「はい、どういたしまして」

につこりと微笑み咲結実は答えた。咲結実の表情に康彦も笑みを浮かべる。

「さて、一眠りするかな」

言うと康彦は大きく背伸びをした。

「布団、用意するね」

「いいよ。自分でやるから」

咲結実を制すると康彦は立ち上がって隣の部屋の襖を開けた。

「そう？ わかった。お休み」

「ああ」

閉ざされた襖を見つめて咲結実は少し寂しくなった。工場で働く康彦は三勤交代でなかなか休みも時間も合わない。夜働いて昼帰ってくるそのまま眠ってしまう。取り残されたように独りになって咲結実は寂しかった。

疲れているのはわかっているけど少しくらい構って欲しい。そう思うのはわがままなのだろうか？

「仕方ないよ」

言い聞かせるように咲結実は呟いた。

咲結実と康彦が出会ったのは勤務先の工場だった。咲結実が康彦が働く工場の社員が利用する食堂で働いていた。働きはじめたのは一年前。咲結実は高校を卒業と同時に就職した。家から離れたくて遠い場所を選んで就職した。独り暮らしをはじめて慣れないうちは辛かった。友達もいないたった独りの職場、場所で戸惑うことばかりだった。

そんなとき咲結実偶然に康彦と知り会った。休日の午後、暇つぶしに寄ったレンタルビデオショップで康彦に会ったのがきっかけだった。お互い工場の食堂で何度か顔を合わせていたこともあってどちらともなく声をかけた。それ以来康彦と親しくなり食堂で顔を会わせる度に話すようになった。

見知らぬ土地ではじめて出来た友達。一緒にいてお互い好意を覚えるのに時間はかからなかった。

付き合うようになってすぐに咲結実が康彦のアパートに転がり込んだ。康彦が暮らすアパートは築二十年以上経つ六畳二間の古い作

りで妙に心地良かった。あまりの居心地の良さに咲結実は気に入って、一緒に暮らしはじめたのだった。

咲結実が康彦が眠る部屋を隔てた襖に寄りかかる。膝を抱えた。憂鬱で胸苦しさを感じる。息が浅い。細胞のひとつひとつが抉じ開けられるような嫌な感覚。春になるといつもそうだ。苦しくて耐えがたい不安と腕を切りたい衝動に襲われる。

咲結実が左手首を見つめた。切り刻まれた傷跡。いたたまれなくて咲結実が左手首を握り締めた。あの時も衝動を押さえきれなかった。別に死にたかったわけじゃない。どうしていいのかわからなかった。

母に嫌われなくなかった。ただ、それだけだった。

咲結実の母は幼いときに離婚して家を出て行ったきりだった。幼心に自分のせいで母に捨てられたと思っていた。ずっと。

小学校四年生の時父が今の母と再婚した。新しい母は優しく、血の繋がらない咲結実を本当の子供のようにかわいがってくれた。新しい母に嫌われなくなかった。また捨てられてしまうのが怖かった。いい子でいなきゃいけないといつも自らに言い聞かせていた。中学の時に歳の離れた弟が生まれて、それでも母は分け隔てなく愛情を注いでくれていた。咲結実が歳の離れた弟をとてかわいがっていた。

けれども心のどこかで嫉妬していた。

いい子でいようと思えば思うほどガンジガラメになって歪んで。腕を切ると酷く落ち着いた。自らの腕を切り裂くようになったのは高校に通うようになってからだ。隠れて腕を切って隠して。誰も気づいてくれない。気づかれないと思う心と気づいて欲しかった。思ひは、弟に対する嫉妬と愛情によく似ている。

あの日のことを思い出す。

「お母さんこれどうするの？」

「物置に片付けてくれる？」

弟のために買ったおもちゃの入っていたダンボール。その片付けをするために手に取ったカッターナイフ。ギリギリと刃を出してダンボールに添えた。真っ直ぐ切り裂いて手元を狂わせればこの腕を切り裂くことが出来るのだろうか？ ぼんやりとそんなことを考えながら咲結実には真っ直ぐに刃を引いた。

「あ……」

まるで咲結実の心に描いていたようにカッターナイフの刃は左腕を切り裂いた。止めどなく血が流れて、床に堕ちていく。痛いと言うよりは熱くて、ぬるぬるとした嫌な感触。滴っていく血を咲結実にはぼんやりと見つめていた。

「うわああアーン」

弟の泣き声がすぐ近くでした。振り返るとすぐ側で咲結実の血に驚いて弟が泣いていた。

「どうしたの？」

弟の泣き声に慌てて母がやってきた。そして咲結実の血を見て悲鳴を上げた。母にしがみつき泣く弟と、慌てふためく母と。交互に見つめた。

「ダンボール、壊そうとして切れちゃったの」

咲結実はそう言って誤魔化した。違う。切りたかったの。血だらけになった左腕を押さえながら咲結実はぎこちなく笑っていた。

すぐに病院に連れて行かれた。その時母は咲結実の傷だらけの腕に気づいていたようだった。けれども母は何も聞こうとはしなかった。それ以来母は咲結実に対してどこかよそよそしくなった。咲結実もそんな母に対して距離を置くようになった。家にいるのが辛かった。

腕の傷のことを何も聞こうともしない母はやっぱり自分のことを本当に愛してくれてはいないのだと、咲結実には絶望した。

咲結実には高校を卒業すると進学せずに就職した。逃れるように家

を出た。

このままじゃ、駄目になる。

そう思つて家を出たのに、自分は何も変わらない。春になると無性に腕が切りたくなつた。苦しみもがいていた。

「誰か助けて……」

咲結実は俯いて呟いていた。

嫌な夢を見て康彦は目を覚ました。高鳴る鼓動を押さえつけるように布団から体を起こす。汗びつしよりで気持ちが悪い。大丈夫だからと自分自身に言い聞かせる。

鼓動が収まるのを待っていた。あの日から繰り返し見る悪夢は今でも康彦を苦しめた。

兄が自殺した日から。

「兄貴……」

康彦は悪夢を見るたび兄の顔を思い出そうとした。しかし、思い出すのは遺影の兄の顔で。それ以前の兄の顔がどうしても思い出せなかった。

兄は働いていた工場の寮で自らの命を絶つた。たった独りで。第一発見者は康彦だった。

特別仲のいい兄弟ではない。それでも時折、兄のところに遊びに行っていた。

あの日は嫌な予感がした。部屋のドアノブに触れた瞬間異様な感覚があつて、電気が走つたような気がした。兄弟だからこそ感じたものなのかもしれない。もう兄はこの世にはいないのだと、言葉にならない漠然とした予感。恐る恐る康彦はドアを開いた。瞬間漂ってきた異様な匂い。それから。

それから先は思い出したくもない。それなのに夢に見てはうなされた。

首を吊つて息絶えていた兄の顔は生前のものとはあまりにもか
離れていていた。そのうえ初夏だった。密封された部屋の中で体は
すでに腐敗しはじめていた。

康彦はきつく目を閉じる。

「もう、お願いだから」

この悪夢から解き放つて欲しい。

康彦は強く思った。

けだるい体を起こして康彦は襖を開けた。喉が乾いていた。水が
欲しかった。茶の間を見ると咲結実がテーブルに突っ伏して眠つて
いた。咲結実の寝顔を見て康彦はほっとする。

独りで暮らしていた頃は何度も悪夢にうなされて独り部屋で苦し
んだ。けれども今は咲結実がいる。独りじゃない。その安堵感に康
彦は胸を撫で下ろした。

窓から夕日が差し込んでいる。黄昏の色。干していた洗濯物が風
に揺れていた。何気ない景色。康彦は眠っている咲結実を見つめて
いた。咲結実が左手首を握り締めて眠っていた。咲結実の握り締め
た手首の下にある傷跡を康彦は知っている。何カ所も切りつけられ
た傷跡。その中にある一際大きな傷跡も。それがリストカットの傷
であることは容易に想像がついた。自殺した兄を持つ自分と。リス
トカットの傷を抱えた彼女と。いったいそこに何の因縁があるのだ
ろうか。

咲結実が腕の傷のことを酷く気にかけていることは彼女の仕草を
見て感じていた。けれども康彦は聞くのが怖かった。

康彦は眠る咲結実をいとおしそうに見つめていた。閉めた襖を再
び開くと康彦は毛布を手を取った。

ふと、気配に気づいて目を覚ました。いつの間にか咲結実は一
人ブルに突っ伏して眠っていた。

「こんなところで寝てると風邪引くぞ」

康彦がそつと毛布をかけようとしてくれていた。

「あれ……」

窓の外に目をやれば日は沈もうとしていた。夕日が部屋の中へ差し込んでくる。咲結実は考え込んでいるうちに眠ってしまった。

「やだ、あたし寝てた？」

「よだれ、垂れてる」

「うそ！」

「冗談」

言つて康彦は笑っていた。

「いじわる。あ、洗濯物片付けなきゃ」

思い出して咲結実は洗濯物を片付けはじめる。せつかくの休日だったのに結局何もしないで終わってしまった。買い物にも行っていない。

「康彦今日も夜勤？」

「昨日で終わり。明日から日勤」

「だったら今から買い物連れてってよ。食べるもの何もない」

「マジで？」

「まじで」

振り返つて咲結実は苦笑いを浮かべた。冷蔵庫の中身は口クなものかなかった。

「しょうがないな。車出すか」

「うん、ありがと」

咲結実は笑顔で頷いた。

買い物から帰ってくる頃にはすっかり暗くなっていた。遅い夕食をすすめたあと部屋の電話が鳴った。

「もしもし」

康彦が電話に出るのを咲結実は夕食の後片付けをしながら聞いていた。

「ああ、母さん。……うん……だから、だいじょうぶだって」

電話は康彦の母親からのようだった。康彦の母は毎日のように電話をかけてくる。康彦も実家にはマメに電話をしているようだった。それに比べて自分はどれだけ家に連絡を取っていないだろう。咲結実は思った。康彦と一緒に暮らすと決めたとき電話を掛けたきり家にもずつと帰っていない。自分がいないほうが親子三人で仲良く暮らしていけるのだろう。きっとそうだ。悲しいけれど仕方ないことだと割り切って咲結実は寂しさを噛み殺した。

「うん、じゃあ切るよ」

短く話を終えて康彦は電話を切った。

「康彦は家族と仲いいのね」

片付けを終わって咲結実は茶の間のテーブルの前に座った。

「……別に、そういうわけでもないんだけど」

康彦は咲結実から目をそらすと煙草を手に取り火をつけた。母親からの電話には理由があった。兄の一件以来母は不安で毎日のように息子の安否を確認しないと気がすまないのだ。独り暮らしをするときもとにかく猛反対された。それでも康彦は母を納得させ、独りで暮らすことを選んだ。母を安心させるために康彦もマメに連絡するようにしていた。

「そう？　だつてよく電話してるから。あたしなんかもうずっと家に電話なんてしてないし、帰ってもない」

咲結実はため息をついた。無意識に左手首を握り締めていた。

「咲結実」

目に見えて咲結実は不安がっていた。昼、帰ってきてからずっとそうだ。笑っているのにどこか不安そうだった。

「なに？」

康彦は煙草を灰皿に押し付けると咲結実を抱き寄せた。

「どうしたの？　康彦」

答えず康彦は強く咲結実を抱きしめた。そんな康彦に咲結実は身を任せる。康彦は咲結実の左手首の傷にそつと指を伸ばした。触れ

る。咲結実はさつと体を強張らせた。咲結実が康彦の体を押しのけた。不安そうな顔で康彦を見上げる。

「咲結実？」

咲結実が傷を隠すように左腕を握り締めた。その不自然な行動。

咲結実が怯えたような表情で康彦を見つめていた。

「お願いだから、見ないで。触らないで！」

咲結実の悲痛な叫びが響いた。康彦には知られたくなかった。

「だってこんな傷。自分でつけたのよ。ねえあたしのこと軽蔑する？ 軽蔑するよね、こんな傷。見ないで！」

叫ぶように言って咲結実はその場に泣き崩れた。突然泣き出した咲結実が康彦は少なからず動揺した。細い肩を震わせ泣き続ける咲結実の姿。康彦はそつと咲結実の肩に触れた。咲結実が康彦を見上げる。康彦は悲しそうな顔で咲結実を見つめていた。

「優しくなんてしないで！ 同情なんていらない！！」

康彦に嫌われたくないのに。心とは裏腹にこんな言葉しか出なかった。そんな自分が嫌で。たまらなく嫌だった。

追い詰めるつもりなんてなかった。泣き続け、苦しむ咲結実の姿に康彦は兄を想った。

兄も同じように辛かったのだろうか？ 咲結実が兄のように自らの命を奪うようなことだけはして欲しくはなかった。俺は咲結実に何をしてあげられるのだろうか？ 強く思った。康彦は咲結実を抱きしめた。

咲結実が抗おうと康彦の腕の中でもがき暴れる。それでも康彦は咲結実の体を抱きしめた。強く。

「同情なんかじゃない。俺は咲結実のこと大切だから。失いたくないんだ。これ以上大切な人を失いたくないんだ」

知らず知らずに康彦は泣いていた。熱い涙が頬を伝う。

その言葉に咲結実の体から力が抜けた。康彦の想いの強さに咲結実が戸惑い、何よりも求めていた言葉だった。

「俺の兄貴は……」

おとなしくなった咲結実を抱きながら康彦は静かに話しはじめた。
「俺が中三の時に自殺したんだ」

「え？」

咲結実にとってはじめて聞く話だった。

「職場の寮で、たった独り首を吊って死んだ。遺書も何もなかったから何で兄貴が死んだのか今でも理由なんてわからないけど。俺はもうこれ以上大切な人を失いたくない。だから」

咲結実を抱きしめる手に力が入る。

「ごめんなさい……」

搾り出すように咲結実と言った。知らなかった。康彦がこんなに辛い思いをしていたなんて。咲結実は思った。そして自分の愚かさを呪った。

「何であやまるんだ」

康彦は問うた。

「だってあたし康彦がそんな辛いことがあったなんて知らなかった。ごめんなさい。それなのにあたし。康彦に酷いこと言って」

「咲結実……」

康彦は抱きしめていた手を緩めた。お互いに見つめあう。康彦は咲結実の左手首の傷に手を伸ばした。両手で包み込む。

「あたし、もう二度とこんなことしないから。だって、だって……」
再び涙が溢れ出して咲結実はむせ返った。その咲結実の背中を康彦はそつと撫でた。咲結実の言葉にならない意思が康彦にもはつきりと伝わってくる。

「うん。わかった。わかったからもう何も言わなくていいから……」
不器用で意地っ張りな、咲結実。けれども。愛しい人を守り続けようと誓った。

それが兄を自殺という形で失った自分に出来ることだった。

暖かな康彦の手。それは欲しくて、欲しくてたまらなかったぬくもりだった。求めていた優しい光。

「うん」

咲結実は小さく頷いた。また涙が溢れる。けれどもそれは悲しい涙ではなかった。康彦は優しく咲結実を抱き寄せた。

やんわりと、優しい風が窓から入り込む。暖かな春の風が凪いでいた。陽が暖かい。

「用意できたよ」

やっと重なった二人の休日。春の日差しに誘われて二人は河原へ花見に出かけることにした。咲結実朝から張り切ってお弁当を作った。

「ちょっと、タンマ」

康彦は隣の部屋で何かを探していた。

「どうしたの？」

一緒に探してあげようかと思い咲結実は隣の部屋にいる康彦のもとへ行くこうとする。

「あー何でもないから、こなくていい」

咲結実を康彦は慌てて制した。

「？」

咲結実は訝しげ、首を傾げた。

危なかったと一息ついて康彦は小さな箱をこっそりポケットへ突っ込んだ。あの夜の誓いを果たす為に用意したそれを。

「おまたせ。さ、行こうぜ」

部屋から出てくると不自然に康彦は笑みを浮かべていた。おかしいと思いつつも咲結実は何も聞かなかった。

家を出て二人そろってたわいもない話をしながら河原まで歩いて行く。

「うわー、きれい」

河原に辿り着くと、一面桜並木が広がっていた。満開の桜が道に沿って咲いている。平日の午前中のせいか、それほど混んではない。桜の花びらが舞う中を二人は手を繋いで歩いた。不思議と会話

が途切れて二人はそれぞれに桜を見つめていた。
何も語らなくても通じ合う瞬間。咲結実が康彦にそっと寄り添った。

一際大きな桜の樹の前で二人は立ち止まった。

「咲結実」

「何？」

「目、瞑って」

康彦は咲結実を見つめて言った。

「なんで？」

「いいから、早く」

咲結実が康彦を見上げて首を傾げた。言われるがまま咲結実が目を閉じた。

康彦はポケットから箱を取り出す。中身は選んで選び抜いて買ってきた指輪だった。康彦は咲結実の左手を取った。康彦は咲結実の薬指に指輪をはめ込んだ。驚いて咲結実が目を開いた。咲結実がまじまじと左の薬指にはめられた銀色の指輪を見つめていた。

「康彦、これ……」

「結婚しよう」

意を決して康彦は言った。心臓が激しく高鳴る。平常心を保とうと康彦は必死だった。

「いいの？ あたしで」

驚いて、咲結実は何を言っているのかわからなかった。康彦を見つめた。こんな自分でいいのだろうか戸惑った。そんな咲結実を見て康彦は力強く頷いた。優しい笑顔で。その笑顔に咲結実の目から涙が溢れた。止まらなかった。

「何で泣くんだよ」

「だって……嬉しくて」

ボロボロに咲結実が涙を流した。嬉しくてただ、泣いた。そんな咲結実を康彦はそっと抱きしめる。

「家族になろう、俺たち」

「……うん」

桜の花びらが舞う。静かに二人を祝福するように。

「一緒に明日を生きていこう」

共に未来を綴るために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2461g/>

桜の花が咲く頃に

2010年10月8日15時28分発行